

深い谷と山に囲まれた場所、民俗芸能の宝庫

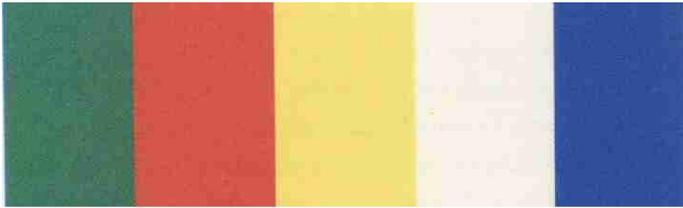


鬼を伝えた人たち① ^{しゅげん}修験の術

花祭や霜月祭・田楽など、三遠南信地域の民俗芸能は修験者が伝えたといわれる。どこにその痕跡があるのか？花祭を中心にしてみる。

修験者・陰陽師の呪術

修験者を山伏という。「山伏」は、山に臥^ふしながら、修行を重ね、験^{しるし}を会得する修行の様を表わした言葉である。修行に明け暮れる修験は独自の術をもっている。その術が祭りに見られる。

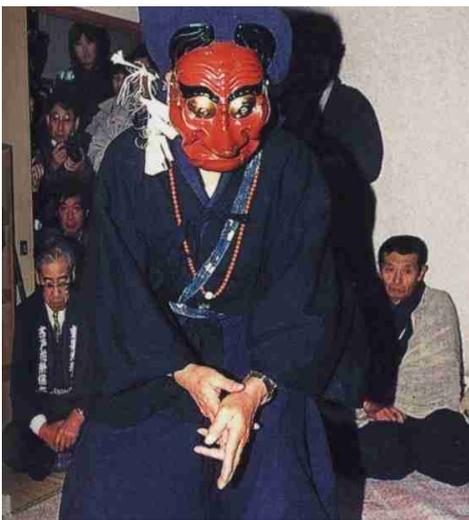


『花祭』・五方位の五色の和紙 山本宏務氏撮影
左から緑・赤・黄・白・青色

す。現在でも、大相撲の房の色・五色の短冊などの言葉にも残っている。また、赤鬼・青鬼等の鬼の色も同様である。

しず 鎮めの手印

祭最終の「鎮め」。呼びこんだ神々を送り返すときに行われる神聖な儀式である。花太夫は、「丸字」を唱え、印を結ぶ。「ヘンベエ」を踏み、祭りを閉じる。一連の所作は、修験の呪術と重なる。



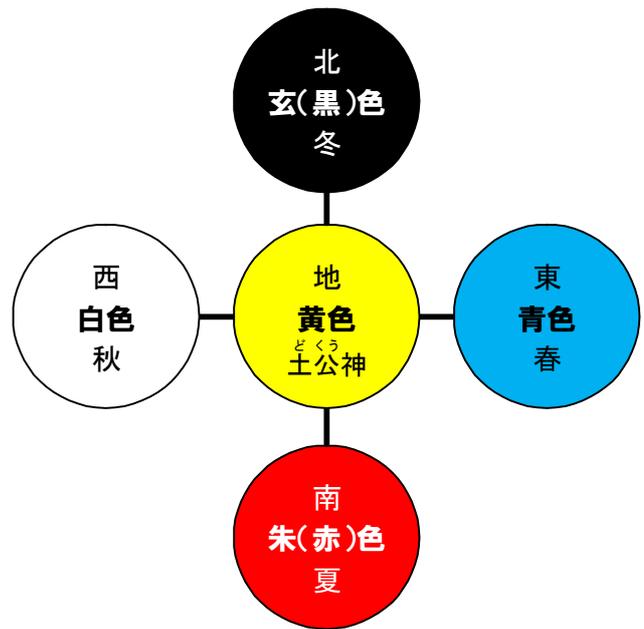
上：鎮め 右：手印 山本宏務氏撮影

修験者 陰陽師の基盤は、中国の道教。互いに影響しあいながら独自の活動をしている。主として、修験者は山で、陰陽師は都市で活動した。

方角と色・鬼の色にも

花祭で使う五色の紙の色は方角をあらわしている。これは、舞庭^{まいど}の五方を示

方角・季節と色の関係

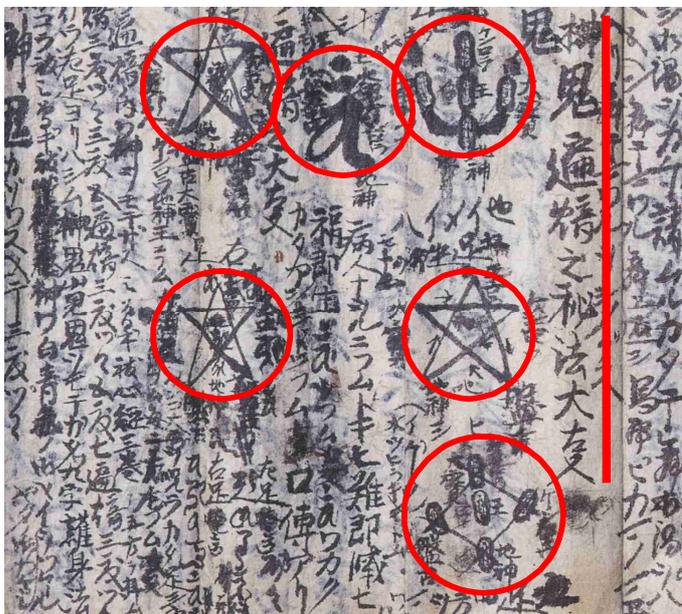


東西南北・中央で舞や神事を行うので「五方の祭」ともいう。土公神は、道教の神として日本に渡来した。陰陽道では「土」を司る神。ペンベエは、土公神の怒りを押さえるために、今も建前に行われている。

除禍の験・セーマン・ドーマン

陰陽師安倍晴明は、星や式神（鬼）を操り凶事・禁忌の除禍をしたという。安倍晴明が使った五芒星を「セーマン」。安倍晴明と対立関係にあった蘆屋道満が用いたものを「ドーマン」という。

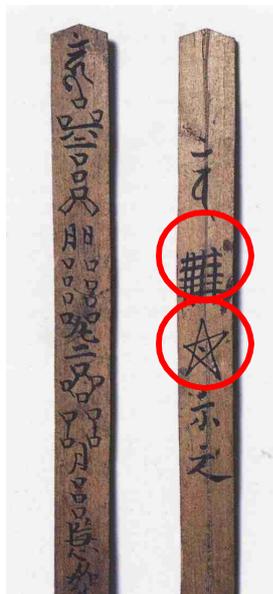
花祭には、セーマン・ドーマン・梵字・神仏名の名を記したのものや絵・九字を組み合わせた呪術用語が見られる。（右図参



『大入古文書』 山本宏務氏撮影
丸印：さまざまな呪文 縦線：柵鬼の「へんべエ」記述

照）花祭の祭文を見ると、多種多様である。

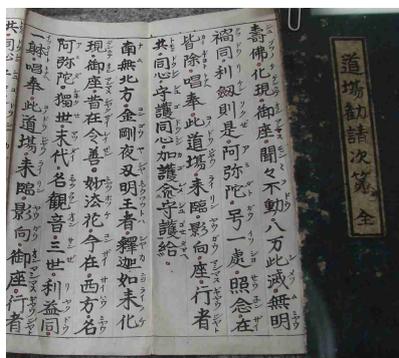
悪霊を退散させる呪術が、これでもかこれでもかと表わされている。それだけ、太陽の衰えと不安を払しょくし、命の蘇りを願っている。いずれも、修験者・陰陽師などの影響が濃い。



左：各種の呪術記号
右上丸印：ドーマン
右下丸印：セーマン
『御園尾林家古文書』
山本宏務氏撮影
尾林家は、修験道の家である。

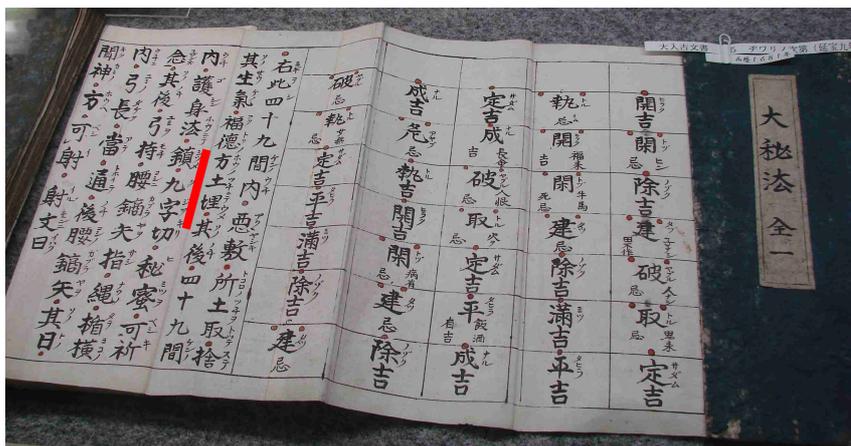


左と下の丸印：セーマンの印のある花祭りの衣装
花祭会館蔵



上『祭文』 行者・加護・守護の文字が随所に見られる。
右『祭文』 九字切の語も記述。

『大入古文書』 花祭会館蔵



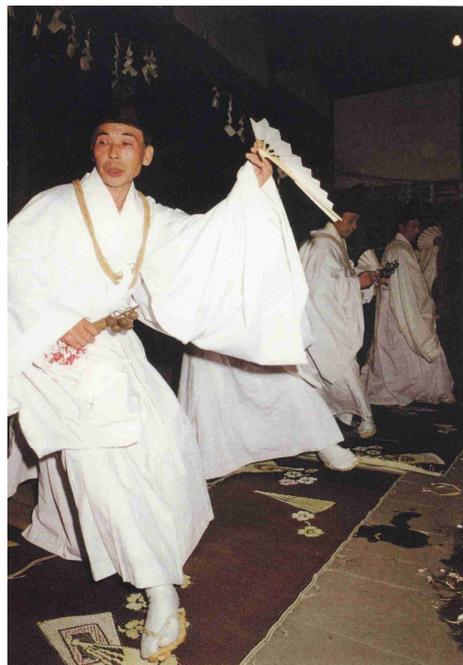
悪の退散・呪術がいっぱい・道教の影

修験道や陰陽道には、悪を振り払うための呪術が多い。「ヘンベエ」や「九字」・「結界」もこの類である。花祭のシンボルは榊鬼だが、それは、「ヘンベエ」する鬼だからである。「ヘンベエ」は中国の道教の呪術「禹歩（ウサギ歩き）」に由来する。

反閤(ヘンベエ・ヘンベ・ヘンバイ)

「反閤」は、「ヘンベエ」とも「ヘンベ」「ヘンバイ」ともいわれる。邪気を払うために「ヘンベエ」を踏む。「ヘンベエ」は足で大地を踏み、大地の霊力をもらい、悪霊の進入を許さない。悪霊をねじ伏せる力がある。

「ヘンベエ」は千鳥足のようにあちこちするが、安定感があり、力強い。



「産神の舞」：宮本辰雄氏撮影
『霜月まつり』信濃教育会刊
「ヘンベエ」の足もとに注意

「九字」と「ヘンベエ」の足の踏み方 藤原明衡著 川口久雄訳注『新猿楽記』東洋文庫 平凡社刊



九字

「九字を切る」・「九字の印を結ぶ」は真言密教や修験道でよくつかわれる。初見は『孫子』。九字とは、道教の「臨 兵 闘 者 皆 陣 烈」 「在」「前」から由来している。このうち「陣」が「陳」、「烈」が「列」に変化しているところもある。

読み方は、「臨^{のぞ}む兵、闘^{たたか}う者、皆^{みなじん}陣^{れつ}をはり烈^{れつ}を作つて前に在り」。忍者が敵を前に唱える言葉と同じであり、結ぶ「印」も同じ。

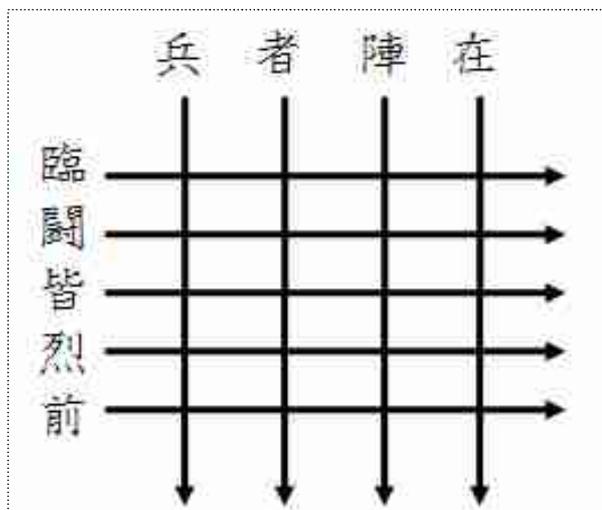
九字とヘンベエ

修験者は指を刀にして、「臨」と唱えて横一線を描く。次に「兵」と唱えて、縦一線を描く。後は、順に格子模様を描いていく。もともと、山の危険を回避する呪文であった。

この九字を唱えながら修験者は、ヘンベエをする。左図参照)ヘンベエは、猿楽の庭でも行われた。

五穀豊穰・長寿延命・子孫繁栄を願い踏む「ヘンベエ」は、民俗芸能や能に広く用いられた。相撲の四股もヘンベエの一種である。

九字とドーマンの関係図



鬼を伝えた人たち②白山修験

花祭は、『大神楽』を原形にしている。大神楽は、本祭3日、前後に30日続く大がかりなものであった。大神楽のためにかかる費用は、「金百両・米百俵」といわれ、毎年の開催は無理であった。また、一村ではとてもできないので、近隣の村が寄り集まって開催した。

大神楽を、簡単にしたのが『花祭』。根底に「死の山」・「白山」の系譜がある。

生まれ清まりと白山・擬死再生

花祭の「釜割り」の原形は、大神楽の「白山（浄土）の山割り」である。

祭りの庭に白山（浄土）を模した「白山^{しらやま}」を作る。無明の橋^{さんず}・三途の川もある。白山には、①還暦②厄年③13歳（神子になる年・成人式^{かみこ}）④生まれ子の人生4つの節目の人しか入れない。ただし、重病人が加わることもある。

「白山に入る」＝「死の世界に入る」を意味する。白装束で白山入りをした夜、悪魔外道^{あくまげどう}の鬼たちに地獄の責めを受ける。この鬼たちを蹴散らすのが山見鬼である。白山より死者を現



鎌倉『白山神社』の「しめ縄」
白山独自のねじったしめ縄：人間の業の多さを表わしているともいう。

世に引き戻す山見鬼。ここでも「善鬼」ぶりが見られる。

白山より死んだ体が蘇生^{そせい}し、新しく生まれ変わり、より強力な生命力が得られる。「生まれ清まり」は、大神楽や花祭の本質である。

なぜ白山か・蘇^{よみがえ}りの系譜

白山は「白」の山。「白」は、方角では「西」をさす。10 ページ参照)「西」方は、浄土・死の世界。「山」は、神が降臨する場・死後の人が行く場、祖霊の住む場であった。

白山の主神は「菊理媛命^{くくりひめのみこと}」。記紀に一度しか出てこない。妻を探して黄泉の国へ行ったイザナギが、この世の境

近くで出会ったのが、「菊理媛命^{くくりひめのみこと}」である。ウジのわいた状態の妻イザナミを見ておそれたイザナギに、「ミソギ」をすすめた神である。

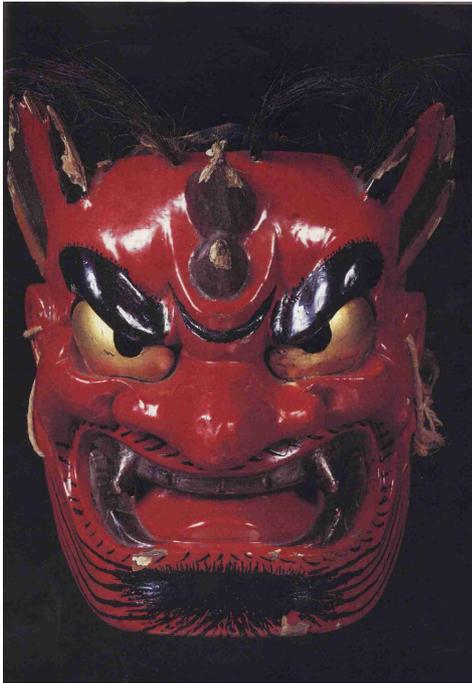
還暦・厄年などの人が、擬死体験する。「ミソギ」によって、黄泉の国から地上に戻ったイザナギのようにリセットする。白山の山割りは、深い意味がある。

白山は、泰澄によって開山され、修験道の霊山として栄えた。天皇崩御の時、葬送を担当する八瀬童子らの信仰篤き山でもある。



古戸『白山祭』 山本宏務氏撮影

古戸の『白山祭』が終わらなければ、各所で『花祭』が開けなかった。『花祭』の元締め祭。延喜年間（901～923）に加賀の白山を修験者が分祀。



「山見鬼」 山本宏務氏撮影

鬼を伝えた人たち③猿楽の面

藤原明衡著『新猿楽記』が羽田八幡宮文庫にある。藤原明衡（989～1066年）は、藤原式家出身の文章博士であった。

『新猿楽記』は、猿楽を楽しむ人々の様子と職業が描かれている。中央の大寺院の「追儺^{ついな}」で、鬼を演じた猿楽師たちは、平安後期には、庶民生活に入り込んでいった。

南北朝の争乱・応仁の乱を経て、猿楽師たちは、戦いを避けて地方へ移住した。もはや、大寺院の庇護のもとに安穩としておられなかったのである。



猿楽能を祭に導入・^{めんぎょう}面形の神・^{こうかん}交歓

猿楽能は、面を用いて滑稽や物まねを演じた。祭は、神事だけでは味気ない。神と人がともに楽しむ芸能が必要であった。

祭を伝えた修験者は、流行していた猿楽能を取り入れた。猿楽能は、さまざまな物語の神に扮して演じた。滑稽・かすみにより、より分かりやすく語りの世界を表現し、村人たちを楽しませた。

豊根村富山に残る祭次第書『御祭礼大事』に「この祭は猿楽なり」と記載されている。猿楽の面形舞の移入により、祭はさらに完成度を高めた。

面形の神々の登場は祭の夜が更けてからである。神と人の交歓で祭はクライマックスを迎える。



猿楽師は行く、戦国大名のいる地方へ

猿楽師は、招かれればどこへでも行った。特に戦国大名はこぞって猿楽師を重用した。なぜか？

行く途中での見聞は情報収集に適していた。最新の技も伝えた。その一つが、金山の開発である。

武田氏滅亡後、家康に仕えた大久保長安は、もとは猿楽師であった。彼の持つ情報によって、伊豆金山・佐渡金山は、未曾有の産出量を誇り、徳川幕府の経済基盤を盤石なものとした。



「伴鬼」 山本宏務氏撮影

鬼を伝えた人たち④

伊勢神楽

天竜川・豊川水系の急峻な地形は、修験者の求めた「神仙境」であった。まず、吉野・熊野の修験者が三遠南信地域に入ってきた。

花祭で大切な神勸請「きるめの王子」は、熊野九十九王子中の王子である。熊野修験の影響が強い。

近世になり、吉野・熊野修験の勢いが衰え、白山修験・伊勢神楽が入ってきた。特に伊勢神楽の舞は、それまでの素朴な舞を華麗な舞いへと変化させた。芸能化の促進である。特に「花の舞」の衣装と所作に芸能として発展した様子が見られる。



「榊鬼」:天井の「白蓋」は神の依り代 山本宏務氏撮影

演者と勢徒（観衆）が一体となり、舞う様子は、花祭にかける村人の熱気を感じる。

伊勢踊りの導入

伊那谷・坂部の『冬祭』諏訪社庭で「伊勢音頭・願人踊り」が行われる。太鼓の音に合わせて、何度も何度も神の来臨を願う。演目からも分かるように、伊勢から導入された踊りである。



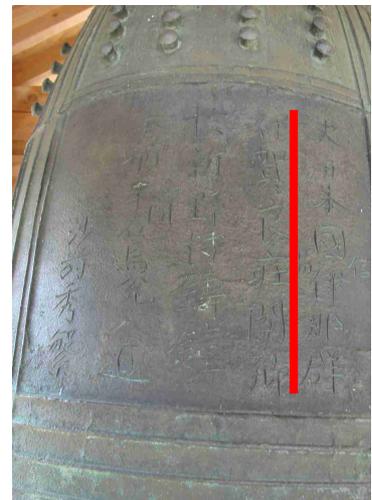
『冬祭り』の「伊勢音頭 願人踊り」

伊勢からの移住者たち・『熊谷家伝記』は語る

坂部に伝わる『熊谷家伝記』には、興味深いことが多く記されている。伊勢からの南朝皇子尹良親王の逃避行や、伊勢関太守の子孫「関盛春」来郷。

祭の演目には、「伊勢音頭・願人踊り」「伊勢の花の舞」のように「伊勢」名ものが多い。また、豊根村では花祭の集大成者万蔵院鈴木氏は、熊野・伊勢信奉の修験者であり、伊勢神楽を持ち込んだといわれている。即ち、祭を湯立てよりも歌舞を中心とした賑やかなものに再構成をした。

祭は、村人が面白い・楽しいと感じる内容に変容していった。祭の日だけは許される悪口雑言の数々、別名『悪態祭』という。村人の鬱々としたエネルギーの発散場であった。



新野・瑞光院に残る関氏寄進の梵鐘。伊賀良莊（飯田旧名）関郷」の銘あり。